

第5回コミュニケーション・キャンプ実施報告

平成16年度1年次会

石井克佳 初谷和行 對崎加奈子 茂木好和
小松孝太郎 後藤卷子 鈴木正徳 洪木陽介 劍持智恵

今年で5年目を迎えるコミュニケーション・キャンプでは、昨年度の検討事項を引き継ぐ形で、問題点の整理と改良を試みた。今回は特に、諸活動における生徒のコミュニケーション能力の育成と、引率教師・インストラクター・ホテルスタッフの共通理解の増進を図った。本報告は、コミュニケーション・キャンプの概要、各活動のまとめ、引率教師の考察、生徒アンケート結果をまとめたものである。

キーワード コミュニケーション能力 課題解決 人間関係

I. はじめに

今年5回目を迎えるコミュニケーション・キャンプであるが、内容や目的は1年次生を担当する担任と副担任に任されている。入学早々の生徒たちに何をメッセージとして伝え、どんな能力の育成を図っていくのかについて、準備作業を進めながら検討を重ねてきた。その過程で明確になったのは次の点である。

- ①教師は早期に生徒の特徴を把握し、今後のホームルーム経営に生かす。特に、積極性のある生徒を把握し、消極的な生徒へのサポートを行う。
- ②規則正しい集団生活を通して、学校生活のリズムを形成する。「時間を守る」をスローガンに掲げ、今後の活動でも継続して指導する。
- ③昼間の活動はインストラクターによる指導が多いが、なるべく教師が生徒と接する機会を設ける。特に、就寝前のホームルーム活動では、教師から生徒に伝える場を設ける。

II. 目的

コミュニケーション・キャンプとは入学式の翌日から、学校を離れて3泊4日の合宿を行うものである。その目的は、次の3点である。

- ①新入生160名が早期にコミュニケーション能力を高め、グループやクラスの仲間と協力して問題を解決していく方法を体験する。
- ②総合学科における生活・学習体制を学び、「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」という基本姿勢を理解する。
- ③黒姫高原の自然に触れ、人間と自然環境が調和して生活することを学ぶ。

III. 各活動の振り返り

1. 日程について

昨年度の日程を基本にしたが、今年度は夜の時間帯にホームルームを設け、担任と副担任が生徒と接する時間を確保した。

	4/10 (土)	4/11 (日)	4/12 (月)	4/13 (火)
6:00		起床 外気浴 整理・整頓	起床 外気浴 整理・整頓	起床 外気浴 部屋整理
7:00	欠席連絡 校門開錠	朝食	朝食	朝食
8:00	バス集合	準備	準備	荷物整理
8:30	出発 バス	8:20 集合	8:20 集合	ホテル前に集合
9:00	↓ 自己紹介(1)	野外活動 ①マウンテンバイク ②マウンテンバイク	野外活動 ①PA→クイズラリー ②クイズラリー→PA	活動開始 クラスごとに 写真撮影
10:00	休憩 自己紹介(2)	③PA→クイズラリー ④クイズラリー→PA	③マウンテンバイク ④マウンテンバイク	調理開始
11:00				
12:00	到着			昼食
1:00	昼食 ホテル出発 アイスブレイク			荷物の確認 出発式 バス乗車 出発
2:00				
3:00				
4:00	アイスブレイク終了 ホテル着入室 係打合せ 入浴	帰着 ミーティング 入浴 休憩	帰着 ミーティング 入浴 休憩	学校着 解散
5:00				
6:00	夕食	夕食 テーブルマナー講座	夕食 夕食終了	
7:00	講義 総合学科とは 産業社会と人間 職業社会と人間 学生生活全般 途中休憩	夕食終了 産業社会と人間 職業社会と人間 講義	7:15 クラス対抗 レクリエーション	
8:00				
9:00	講義終了・ 入浴	授業終了 日誌記録 9:30 H. R.	9:30 H. R.	
10:00	日誌記録 就寝準備 点呼 消灯	就寝準備 点呼 消灯	日誌記録 就寝準備 点呼 消灯	
11:00	就寝	就寝	就寝	

活動全般の内容は次のとおりである。活動については1班10名、全体で16班160名の活動班（クラスに依存しない）が組まれている。ただし、雪上ネイチャークイズラリーについては、1班をさらに半数にし、5人となっている。

日程	形態	内容
1日目	午後 全員・活動班	アイスブレイク
2日目	1日 10人×8班 80人	マウンテンバイク
	午前 10人×4班 40人	プロジェクトアドベンチャー
	5人×8班 40人	雪上ネイチャークイズラリー
	午後	午前中のプロジェクトアドベンチャー班→雪上ネイチャークイズラリーへ、雪上ネイチャークイズラリー班→プロジェクトアドベンチャーへ
	夜 クラス	HRごとのミーティング
3日目	1日 午前 午後	2日目に同じ 2日目のマウンテンバイク班→プロジェクトアドベンチャー・雪上ネイチャークイズラリーへ、プロジェクトアドベンチャー・雪上ネイチャークイズラリー班→マウンテンバイクへ
	夜	クラス クラス対抗レクリエーション
4日目	午前 クラス クラス・活動班	大縄跳び カレー作り 色紙書き

活動については、昨年度の反省・課題等を解決するために、いくつかの改善が行われた。昨年実施したエコハイキングを雪上ネイチャークイズラリーに変更した。1つ1つの活動内容は、昨年度の研究紀要に詳細に記述してあるのでそちらを参照していただき、ここでは改善点を中心に述べることにする。

2. 雪上ネイチャークイズラリー

昨年のエコハイキングの反省点を簡単にあげると、次のようなものがあった

- ・コースを歩くこと自体が目的ではない。生徒同士がコミュニケーションを取り、感動を共有できるように改善して欲しい。
- ・何がエコなのかわかりにくい 等

そこで、今年度は新たな試みとして、雪上ネイチャークイズラリーを実施した。その実施内容は次のようである。

〔概要〕

森の中に設定されたコースをグループで歩き、森や里山の自然に関する設問（クイズサイン）に協力して答えを出しながら、決められた時間内にゴールして、その得点を競い合う。

〔目的〕

- ①自然系のクイズサインを解いて行くことにより、五感を使って自然に触れたり、自然を見る目などを養う。
- ②地図やコンパス、ルート上のコースサイン（道標・看板・目印のテープ）を頼りに、自分たちで歩くことで、より積極的にプログラムに参加し、自主性や自己判断能力を高める。
- ③森の中をグループで歩き、自然に関する設問を協力しあって解決していくことで、コミュニケーションを高める。
- ④得点を競うフィールドゲームであるが、一番大切なのは森の中で、ゆったりした気持ちで自然を楽しむ。

〔活動エリア〕

信濃路自然歩道周辺〔ホテル近く〕の里山

〔活動時間〕

2時間半～3時間

〔グループ〕

1グループ5人（活動班10人を半分に分ける）

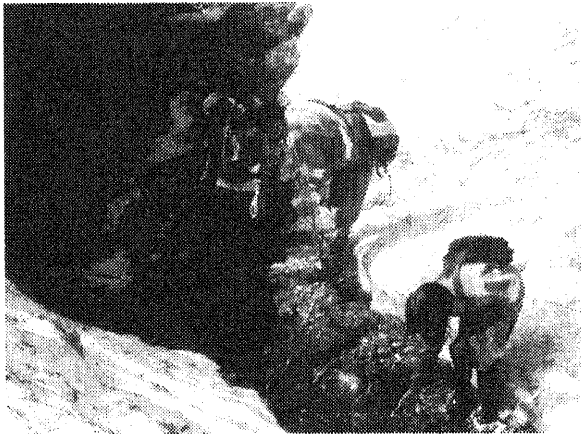
〔持ち物〕

デイバック・水筒・シート・雨具・時計・筆記用具

〔活動の流れ〕

- ①集合。信濃路自然歩道まで移動（徒歩約10分）。
- ②解答用紙・地図・コンパス・クリップボードの配布。
- ③コースおよびルールの説明、時計合わせ。
- ④グループ名が決定した班から順次スタート。
- ⑤道標・看板・コースサインを頼りに森を歩き、各所に設けられたクイズサイン（10～20問程度）を解いていく。
- ⑥グループ全員でゴールし、到着時間を記入する。
*あらかじめ15分以内の目標タイムが設定されているので、その時間内にゴールしないと得点にならない。隠しタイムのピタリ賞もある。グループ全員が同時にゴールしないと、大幅な減点になるので注意する。
- ⑦全員が戻ってきたところで、各クイズサインの答えを、インストラクターが説明する。

⑧ホテルに徒歩で戻る。



〔雪上ネイチャークイズラリーの様子〕

〔賞〕

上位グループには賞品も用意されているので、気合を入れて頑張ること。

〔注意〕

- ①むやみに木を傷つけたり、枝を折ったりしないようにする。
- ②コースは、迷わないように安全管理がされているが、必ずグループで行動し、道が分からなくなった時は、来た道に分かる場所まで戻る。
- ③ゴミは必ず持ち帰る。

このような形で実施し、実施後の生徒のアンケートを昨年と比較すると以下ようになった。左側が昨年度のエコハイキング、右側が今年度の雪上ネイチャークイズラリーの数字である。

良かった	37%→46%
まあまあ良かった	30%→33%
どちらでも	16%→16%
あまり良くなかった	12%→3%
良くなかった	5%→2%

数字からも明らかなように、内容を変えた成果が出たと考えられる。単にインストラクターにくっついて歩くより、しっかりと課題や目的意識を持って活動させたことが好結果につながったようである。

3. クラス対抗レク

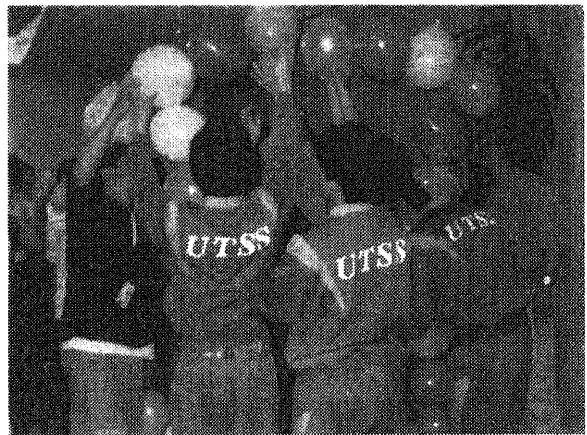
昨年の反省点には次のようなものがあった。

・4つの課題（ゲーム）に取り組むグループ10人がそれぞれの場所で活動を行ったので、1つのグループが活動している様子を他のグループが応援し、クラスの連

帯感を高めたいとする意図がかなわなかった。等

そこで、今年度は伝言ゲーム→風船ふくらまし→風船の塔→風船をはさんでのムカデ競争と、1つの課題をクリアしたら、次のグループにつないでいくという方法を取った。こうすることより、他のグループを応援し、クラスの帰属意識を高めることができればと考えた。アンケート結果の比較は次のようになった。

良かった	35%→60%
まあまあ良かった	38%→19%
どちらでも	16%→15%
あまり良くなかった	7%→4%
良くなかった	4%→2%



〔クラス対抗レク〕

やはり、クラスの他の課題を見て応援することによりその場が盛り上がり、良い結果となった。また、2日目の夜にクラスごとのミーティングを設けたことも大変良かった。ここでこのクラス対抗レクリエーションのグループを決め、それぞれのグループで作戦会議ができたことで、本番がいっそう盛り上がったと考えられる。

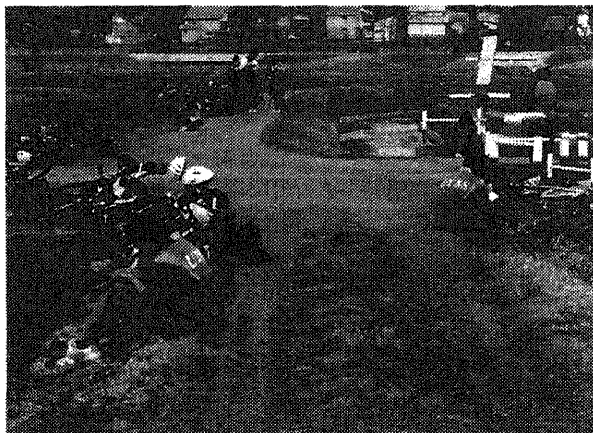
4. マウンテンバイク

昨年の反省点として、マウンテンバイクをすること自体が目的ではなく、マウンテンバイクを通して、生徒相互のコミュニケーションを取る工夫がさらに必要であるということが挙げられた。また、急な上り坂になると自転車を降りてしまい、押して歩いてしまうということもあった。

今年度については、途中休憩の場で、簡単なゲームや自然に親しむ内容が入り、コミュニケーションを取る工夫が随所に見られた。また、走行距離数を若干少なくしたことから余裕も見られた。アンケート結果の比較は次のとおりである。

良かった	19%→54%
まあまあ良かった	31%→24%
どちらでも	22%→9%
あまり良くなかった	16%→6%
良くなかった	12%→7%

昨年は一日は雨に降られしまい、過酷な条件の中でのマウンテンバイクだったので、単純に数字の比較はできないかもしれないが、改善した結果が表れている数字となった。今年度は逆に、初夏を思わせるような暑さの中だったことを加えておく。



〔マウンテンバイク休憩中のレク〕

5. カレー作り等

上記以外の内容については、おおむね昨年と同様に実施した。カレー作りについてはクラス対抗レクリエーションや大縄跳びの結果次第で、肉やたまねぎ、ジャガイモ等の材料の量が変わったわけだが、結果が良かったグループが具材が多すぎるようになってしまった。教員側も準備した具材をすべて生徒に配分し、生徒も受け取った具材をすべて使い切るということになってしまった。

6. 活動全般をとおして

昨年度の反省・課題等を解決することにより、さらに進化した活動ができたと考えられる。これは、生徒のアンケート結果を見ても明らかである。昨年が天候が悪かったことを差し引いても、かなり良い結果となったと感じている。

これは、実施年次の反省等が次の年次にしっかりと受け継がれている校内の体制の良さを物語っていると自負できる。また、昨年の反省として、「慣れは恐ろしい」ということがあげられていた。これは肝に命じておかなければならないことである。学校、ホテル、インストラクターが現状に満足することなく、さらに高い次元での

コミュニケーションキャンプを目指していくことが不可欠である。それには、お互いの本音をぶつけ合いながら意思疎通をしっかりと図り、さらに強い協力体制を築いていく必要がある。

7. 生活面（食事・風呂）

学年方針の一つとして、「時間を守ること」の指導を通して、高校生活における基本的な生活習慣を育成することを挙げている。コミュニケーションキャンプでは、様々な活動が予定されており、起床から就寝まで分刻みのスケジュールが組まれているため、その指導を行うための良い機会であった。この指導の中でわれわれ教員が気をつけたことは、教員が集合時間・場所を口うるさく生徒に伝えるのではなく、生徒がそれらを主体的に判断して行動する場を設けることであった。具体的には、教員が「何時にここに集合しなさい」と言うのではなく、「しおりに集合時間と場所が書いてあるから、各自でそれをよく読んで行動しなさい」と生徒に伝えることを心がけた。

実際の生徒の生活態度はどうであったかという点、後述する問題以外には、生徒は規律正しく生活していたように思える。各活動の終了時間が班単位で異なるため、入浴の割り振りにおける問題が心配されていたが、担当教員の指示を入浴係がよく把握し、班員に確実に伝達していたため、各自が時間を守って行動することができていた。また、食事の準備や片付けについても、同様にスムーズに行うことができていた。

問題点としては、以下の2つが挙げられる。まず1つ目は、時計を持参していなかった生徒が多かったことである。彼らは他の生徒から時間を聞いて行動していたようであり、助け合いという側面からは評価できよう。しかし、それよりもやはり「時間を守ること」という基本的な生活習慣の育成の側面から考えて、各自が時計を持ち、各自で時間を判断することができるようになってほしい。2つ目の問題点は、就寝時間を守ることができなかった生徒がいたことである。ある部屋がうるさかったために、周りの部屋の生徒が落ち着いて寝ることができず、寝不足で翌日に体調を崩してしまう生徒もいた。同室の友達とコミュニケーションが取れ、様々な話題について話し合うことは重要であるが、決められたことはきちんと守って周囲に迷惑をかけないという態度が必要である。

IV. 保健関係報告

事前の健康相談では15件の相談があり、事前打合せ

時に、保健調査のまとめとともに引率者に報告した。例年通り持病の状況を調査し、必要に応じて面談を実施した。今年度は車椅子利用の生徒の対応についての検討を行った。筑波大学大学院生に介護ボランティアをお願いし、出発から帰着まで生活面を中心に介護を担当していただいた。また、食物アレルギーをもつ生徒の対応についてはホテルと連絡をとり、食材の確認をお願いした。キャンプ中はケガ・病気等の緊急時の対応を確認したが、特に重大なケガ・病気がなく、無事4日間を過ごすことができた。

V. 生徒アンケート

実施後、学校に戻ってからアンケートを実施した。結果は、資料1の通りである。前項「Ⅲ. 各活動の振り返り」でも述べたように、昨年度実施したアンケート結果と比較すると、ほとんどの項目で「良かった」「まあまあ良かった」の割合が増えていた。以下に、要点を整理する。数字は、左側が昨年度、右側が今年度のアンケート結果である。

・「4. キャンプに行く前に目標はありましたか」

あった 32%→52%

なかった 68%→48%

ほとんどの生徒が目標として「友達を作る」「クラスの生徒と仲良くなる」ことを挙げていた。

・「2. 実際に行ってみてどうでしたか」

行ってよかった 88%→90%

何とも思わない 10%→9%

行かなければよかった 2%→1%

コミュニケーション・キャンプの評価はともに高く、その理由として実施形態とそのノウハウ、反省事項が引き継がれていることが挙げられる。

・「3. 来年の1年生も体験したほうが良いと思いますか」

そう思う 85%→86%

どちらでもない 13%→13%

そうは思わない 2%→1%

・「6. 宿泊したホテルはどうでしたか」

良かった 30%→52%

まあまあ良かった 37%→39%

どちらでもない 24%→7%

あまり良くなかった 6%→2%

良くなかった 3%→0%

・「7. 往復に利用したバスはどうでしたか」

(昨年度データなし)

良かった	43%
まあまあ良かった	39%
どちらでもない	16%
あまり良くなかった	2%
良くなかった	0%

今年度の引率を実施するに当たり、昨年度の引率教師との引継ぎに時間をかけた。そのため、今年度は昨年度と変わらずに、あるいはそれを上回る良い結果を得ることができた。

VI. おわりに

昨年度の引率者が3名いる中で実施したため、前回の反省事項を意識し、改良することを心がけた。とりわけ、引率教師・インストラクター・ホテルスタッフの共通理解の増進を図るためには、何が必要かを考えることには時間をかけて検討した。この点について例を挙げると、生徒動静をインストラクターから報告してもらい、キャンプ中にミーティングを行うことを実施した。

インストラクターから報告された内容を一部紹介する。積極的な行動を評価された生徒については次のようなコメントが報告された。

2004		コミュニケーション・キャンプ生徒観察表		
月日		種目	MTB・PA・雷上	
活動班	班	指導員		
クラス	番号	キャンプネーム	観察	所見
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	
			A D	

評価基準 周囲の者とのコミュニケーションにおいて、
 A…行動にプラス面が現れている。
 D…積極性が見られる。体調不良など。

「人の気持ちを察しみみんなに投げかけている。自分が今何をしたらいいのかを考えていた。どうすればうまくいか考え、人の助けを自然とできる。思うことを行動していく気持ちを表そうとしている。男女の隔てなく考えを言え、行動できる。できる限りのことをやろうとしている。周りの子に対し自分で言葉がけができる。積極性

はよい。まだ他人の気づかいまでは行かない。周りの子に対し自分で言葉がけができる。積極性はよい。アイデアをよく出し、周りの子に話しかける。先頭に立てるものがあるが、まだ自信はない。話はあまりしないが、自分が周りの子のために支えている。本来は人のことを尊重できるよい点を持っているが、そのことを周りが気付いてあげないといけない。まずはみんなの後について協力しようとする。声は小さいながらアイデアを出して皆に呼びかけようと声を出す。スタートはやる気ないと言っていたが、アイデアを出してみんなを引っ張る。グループのムードメーカー。声がよく出るが脱線もよくある。まだ女子との距離はあるが、ゲームの流れの中では接することができる。やる気がある。」

インストラクターの目から見て様子が気になったり、消極的な生徒については、少数ではあったが次のようなコメントが報告された。

「はずれ気味。話を聞かない。表面に出さない。ニッカド電池タイプ。積極的だが突出しがち。見た目より素直だが、がんばるのが格好悪い。ペースが違う、大変。」

これらの報告を引率教師が共有し、必要に応じて翌日の体験活動を担当するインストラクターへ伝えた。その結果、引率教師とインストラクター間で話し合う場を作ることができ、意思疎通がスムーズになった。また、その様子がホテルスタッフへも伝わり、良い刺激になったようである。生徒のコミュニケーション能力を高めるためには、まずは引率教師・インストラクター・ホテルスタッフ間の密接なコミュニケーションが大切であることを再確認した次第である。

さて、当初計画した目的はほぼ達成し、ひとつの完成形に近づいたように思われる今回のコミュニケーション・キャンプであったが、さらに改良していくとすれば、どんな点に着目するべきであろうか。学校に戻り、振り返りを行う中で、次のような意見が出された。すなわち、「インストラクターの熱心な対応をベースとした、この取り組み内容は良くできており問題はないが、素直に喜べない面がある。教師として、インストラクター任せのこの取り組みで本当に良いのだろうかと言うことである。コミュニケーション・キャンプの目的である『大自然と触れ、人間と自然環境が調和して生活すること学ぶ』ことはできないまでも、その他の、『コミュニケーション能力を高め、協力して問題を解決していく方法を体験する』や『総合学科における生活・学習体制の理解を図る』ことは、学校でも可能であり、教師として自ら取り組むべきことでないかと思うからである。各年次の生徒の学

校生活の姿勢の差は、コミュニケーション・キャンプの有無より、普段の生徒への接し方によるところが大きいように感じられる。また、時期的な面で、1年生だけでなく、2・3年生も新年度の授業の開始が遅れることである。授業時間を確保し、きちんと行うことは最重要事項の一つでもある。今後、本校がさらに上を目指し新たに掲げた、大学進学への積極的なバックアップ体制を図るためにも、校外学習のあり方について、時期も含め再検討してもよいのではないかと思う。」ということである。

また、昨年度も指摘があったが、入学早々の時期に土曜日日曜日を含めた日程で実施した。キャンプの翌日から2・3年次生は平常授業である。今年度も引率教師がそろって代休を確保することは困難であった。コミュニケーション・キャンプを引率する教師には、事前事後を含め、かなりの体力を要することを付け加えておく。

〈参考文献〉

平成15年度1年次会

(2003) 第4回コミュニケーション・キャンプ実施報告
筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第41集



A組



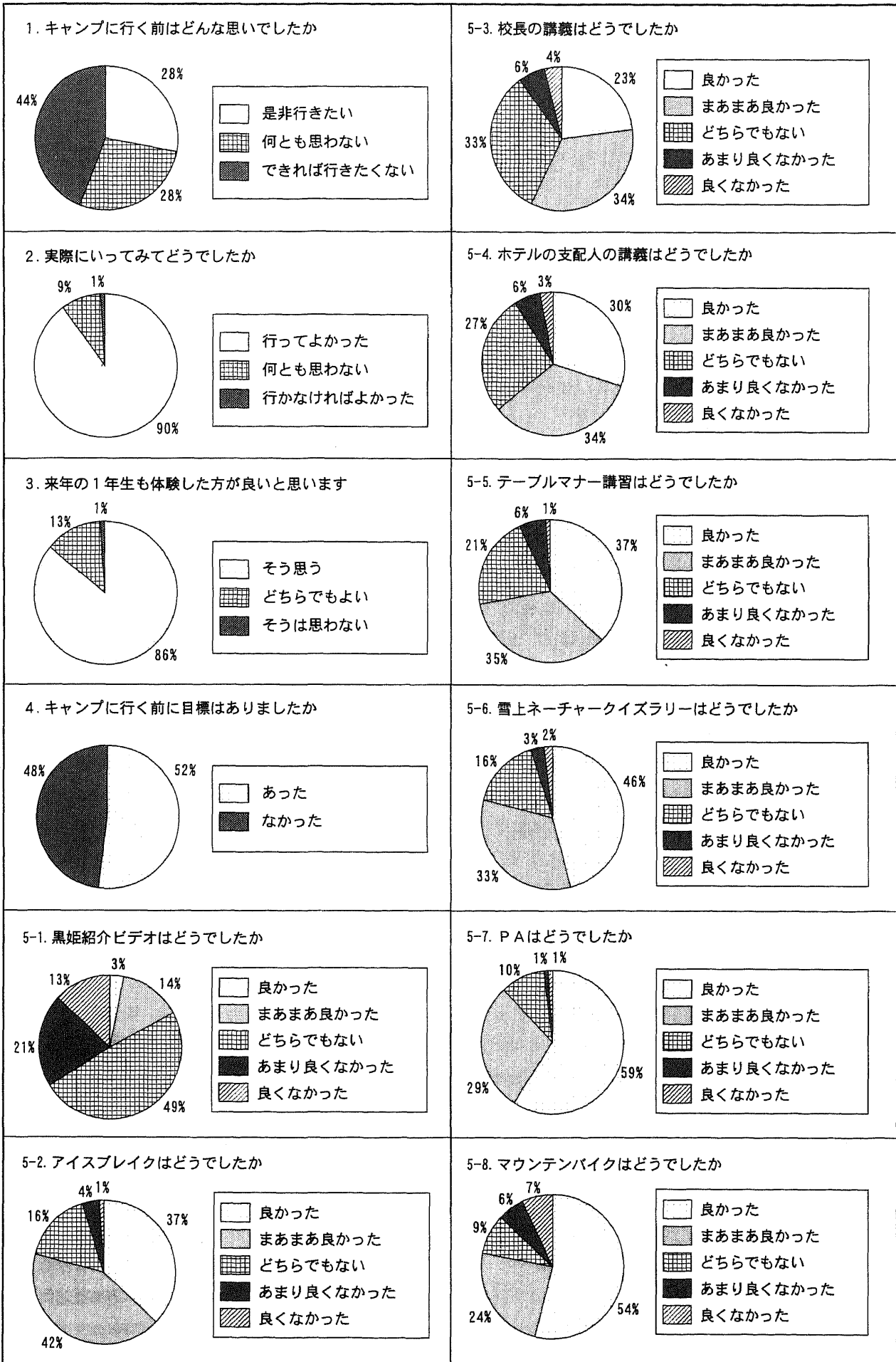
B組



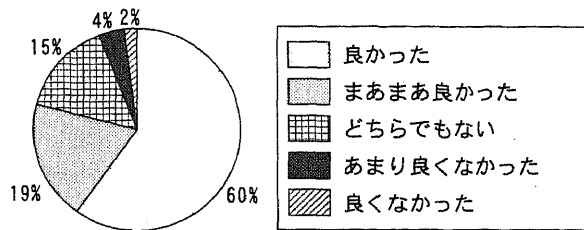
C組



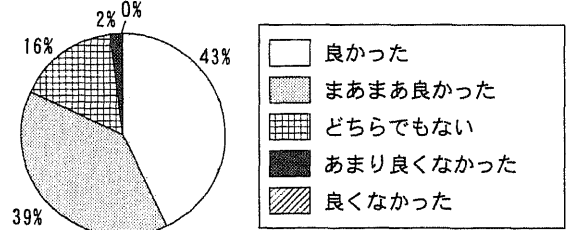
D組



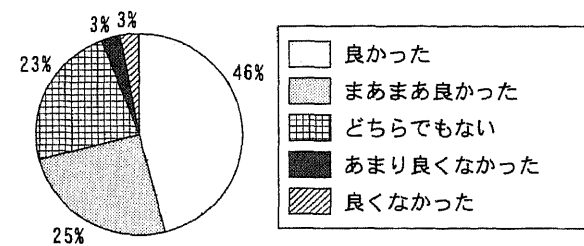
5-9. クラス対抗クレリエーションはどうでしたか



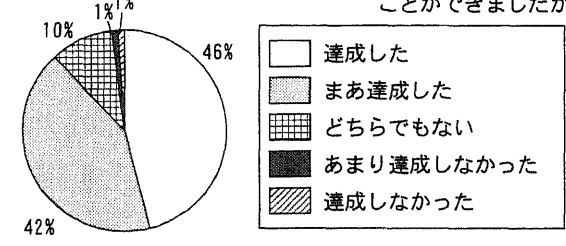
7. 往復に利用したバスはどうでしたか



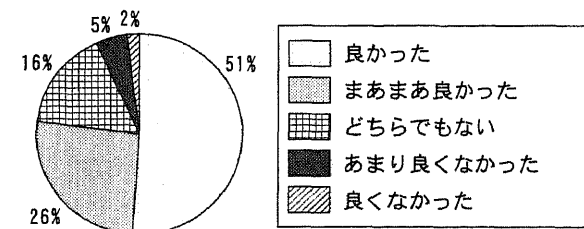
5-10. クラス対抗大縄飛びはどうでしたか



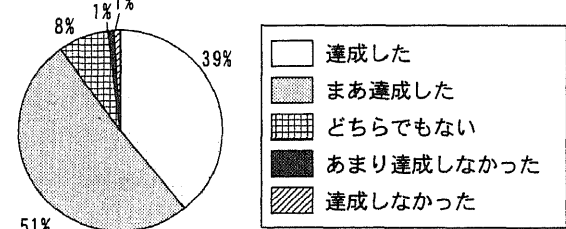
8-1. 新入生160名と早期にコミュニケーション能力を高めることができましたか



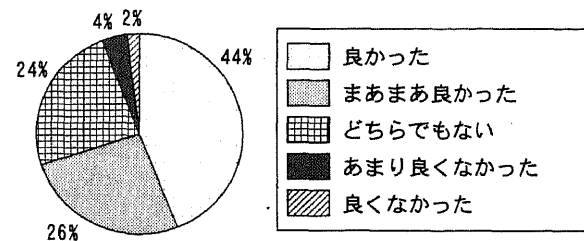
5-11. カレー作りはどうでしたか



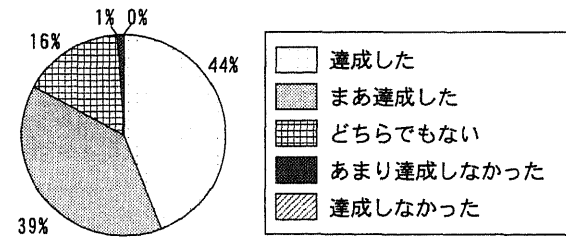
8-2. 総合学科における生活・学習を学ぶことができましたか



5-12. 色紙交換はどうでしたか



8-3. 黒姫の自然に触れることができましたか



6. 宿泊したホテルはどうでしたか

